



# ますますアナログ in the IT時代



私が留学した頃は、日本から届く手紙を開くワクワク感があったが、今の留学生からはそれは失われてきている。帰国後、子育てのため転職し語学学校を立ち上げたがIT時代のお陰で、ホームページを覗いた方からの相談が増えて行った。教育畑出身でない私はジャーナリズム界に身を置いた経験から、特に不登校、引きこもりの相談者とは肉声で取材する方法を繰り返し行きついたのが経験則と科学俯瞰統合だった。

その下敷きになったのが「ヒトの教育の会」の井口潔理事長が提唱する生物学的論。人間の脳は3層構造になっており、中心から大きく分けて、脳幹、大脳辺縁系（古い脳）、大脳新皮質系（新しい脳）から構成されている。脳幹は一番中心部にある脊髄に繋がっており、生命を維持する大切な器官。その脳幹の上部にあるのが古い脳で感性脳、さらにこの感性脳を覆うようにあるのが新しい脳で知性脳と呼ばれる。

感性は生得的なものに対し、知性は効率や合理性を尊び、生きるために手段を考え、時代と共にその基準は大きく変わって行くとする「心の成長生理」。感性は先祖から継承し生まれた時から持ち合わせた生得的なもので、生まれた時には眠っているが「よりよく生きようとする力」を潜在的に内蔵している。この機能は時代が経っても不変のものであり、すべての遺伝的資質は環境刺激の影響を受けて発現するとする「心の個体発生説」である。

この紙面で紹介している河森天開は、ニュージーランド留学前まで桶川市にあるフリースクール・いなほ保育園の中等部に通っていた。ここで感性脳をじっくりと育て上げた彼は、留学を始めた当初は数学の方程式問題は苦勞したようだが、文章問題となると一気にハードルをクリアし始めた。そして入学一年目でラグビー部のスタメンにも選ばれるなど「いなほ保育園」の脳の感性と知性の調和実践結果を海外でお披露目している。

18世紀の蒸気機関車による産業革命は時代を経て、21世紀を生きる私たちの間で人口知能（AI）論争が喧しい。そのような中この号で紹介している中学、高校生がAI疑問を活字にしているのには勇気づけられる。

フリースクール・いなほ保育園の北原和子園長は言う。薬なんか飲むより、病気にならない子に育てればいいのです。障害のある子供でも病の人でも人間は皆そういう力を持っているのですが、持っていることを忘れてしまう様な社会になってしまったんです。丈夫な体をつくれればよいのです。そのためには与えすぎは禁物でやってあげるのもダメ。子供でも自分で生きるという気持ちがなかったらダメ。体が育てば感性が芽生え、感性が芽生えてくれば自然の美しさや、生きることが喜びだって分かってくるのです。それを見つけ出し、伸ばしてやるのが私たちの出来ることではないでしょうか。こんなこと教えようと思っても不可能です。生きるなかで、出来上がってくるものですから。

2年にわたるいなほ保育園通いと北原和子園長のインタビューを続け「いなほ保育園の十二月月」を岩波書店から出版した塩野米松氏の言葉。

病にかかれれば、医者や薬に頼る。寒い日には暖房を入れ、暑ければクーラーを。遊びには道具が必要で、勉強には理想的な環境が。何もかも不足なものは補うのが当然と思ひこんでいないだろうか。変えようのない自然の営みや季節さえも変えたいし、変えられると思ひこんでしまった。感じとる。自ら考える。そして行動する。そこに喜びが生まれる。根さえしっかりしていれば、嵐や災害にも耐えていける。風や雨は災いではなく変化として楽しむもの。

IT時代真っ最中の21世紀に生きる若者たちが、内面に問いかける時間のないスピード感にブレーキとバック・ギアを掛けられなくなっている感がますます強い。

Dear Michi

お久しぶりです。ご連絡いただき有り難うございます。  
【次世代育成の支援活動】については、ほぼ3年前にご縁を得てNPO法人【あい・ぼーとステーション】が主催するプロジェクトの一つ：(子育て・まちづくり支援プロジェクター養成講座)の受講終了 → 資格認定を経て、同上法人が指定する都内の子育て支援施設等にて、子育て支援を主とするチーム活動に参加しております。 NPOハロードリーム理事：浜本敬（共育塾いりろり主宰）



## 日系少年野球チームバンクーバー新朝日



試合後は両チームで一纏めに記念撮影をした

第二次世界対戦前にバンクーバーで活躍した日系カナダ人チーム、バンクーバー朝日軍。このチームの栄誉を称えらるとともに、子供たちに野球の楽しみを知ってもらおうと、9月5日、朝日レガシーチーム(記念試合)がバンクーバー市のナナイモパークで行われた。2016年9月15日38号掲載バンクーバー新報より

### 毎日新聞・オピニオン

**人工知能に感じる落とし穴**  
中学生 高山涉14（東京都世田谷区）

私は先日、学校の授業で人工知能（AI）について学習しました。そして私たちの生活の一部になりつつある人工知能には、大きな穴があると感じました。私たちは生活の中で、無駄から学習し同じ過ちを起ささないようにします。しかし人工知能には無駄がありません。最短距離での目標達成を目指します。確かに100%無駄のない世界は利便性が高く、より楽な世界になります。でもそこには感情が生まれません。人間には、過程の中に失敗があるからこそ、結果に満足したり、怒りを覚えたり、悲しくなったりするのです。最短距離での目標達成は楽ですが結果しがなく、感情を生みません。だからこそ、生活の全てを人工知能に任せる世界を目指すのではなく、人工知能にも失敗があり100%完全ではない、そんな世界が必要ではないでしょうか。

感情とは生きるための「種」であり非常に大切なものです。私は人工知能と生活の関わり方を考える時期が来ていると思います。

**人工知能への不安と疑問**  
高校生 山本帆乃美17（堺市中区）

人工知能の急速な発達により、近い将来、多くの仕事や人間の手からロボットの手に移っていくといわれている。それに私は不安と疑問を感じる。

ある研究では今後10年から20年の間に、現在ある車の半分が人工知能に代わられる可能性が示された。オランダでは大学やIT企業などの研究チームが同国の代表的画家、レンブラントの全作品を人口知能などを用いて詳細に分析し、そのデータによって新作を描かせたという。日本でも既にロボットが接客するホテルがある。

ホスピタリティ（おもてなし）や芸術といった、人の感性を表す仕事さえなくなっていくと考えられているが、それまで人工知能に任せられることは間違っていると思う。生活を便利にするための技術開発が、感性や労働という人間らしい生活を奪い、失業などの問題を起こしてしまえば、本末転倒ではないだろうか。

※毎日新聞掲載記事より

### Congratulations!!

- \* 金丸 連 H.J.Cambie Secondary School、優等賞受賞
- \* 中越紀良 McMath Secondary School 入学
- \* 高橋亜佑 SELC 入学
- \* 依田龍介 SELC 入学
- \* 森本琴音 LBC 入学
- \* 大久保健太 オークランド大学付属予備校 入学
- \* 中越紀良 関西学院大学・人間福祉学部社会起業学学科合格

# MAPLE

2016年 NEWS Vol.75



## Ren Kanemaru

**働くこと**

一時帰国の二ヶ月間、僕はちょっとしたアルバイトを経験しました。お昼前に店舗のシャッターを開け、パンを陳列するところから始まります。次に表を掃いて、看板を出します。夏のパン屋さんは比較的暇です。お店の準備が整えば、後はお客さんを待つだけです。暇があれば座って本を読んでいれば良いんです。そして、お客さんが来ると『こんにちは、いらっしゃいませ』と言うのが大体の流れです。でも大抵の人はこの後でしくじると思います。パンの説明や袋の止め方、レジの打ち方など、分からないことが溢れ出てきます。気が付くと会計時にパンの袋が無くなっている事もあります。

実はこのパン屋さんは僕の両親が営んでいるお店の一つで、とっても小さいんです。だから、開店時から締めまで僕一人だけで、お客さんもせいぜい三人が限界の小ささです。それでもお客さんが来てくださるというのが、場所に印象、何よりも品質の上にある味を持っている武器だと思います。そもそも僕がお店を手伝おうと思ったのは、高校生が短期で働けるところが見つからなかったからです。そこで人がいない日にピンチヒッターで手伝うことにしました。もちろん、バイト代もきちんと貰っています。

僕は今17歳で、来年18歳になります。少しずつ自分が大人の仲間入りをしていると、嬉しい気持ちにもなりますが、今の自分で良いのかと自問自答を問う時もあります。きつと働くということは苦勞をすることが主体で、それを忘れてしまったら意味がなくなってしまう。大変、辛い、でも楽しい事もあると感じられる自分が居ることが大事なのだと思います。バイトでも正社員でも大変な時は大変だし、楽しい時は楽しいはず。雇用状態が違っても環境がその壁を無くしてしまいます。それだけ環境は人を作るということもまたバイトをしてみて感じました。 金丸 連